

氏 名 (本籍)	種 田 綾 乃 (神奈川県)
学 位 の 種 類	博 士 (ヒューマン・ケア科学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 6253 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	地域住民の精神障害 (者) に対する態度とその変容 ー 精神障害者当事者活動の可能性に着目してー
主 査	筑波大学教授 教育学博士 徳 田 克 己
副 査	筑波大学教授 医学博士 中 谷 陽 二
副 査	筑波大学准教授 博士 (文学) 岡 本 智 周
副 査	筑波大学准教授 博士 (社会福祉学) 結 城 俊 哉

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

社会に根強く存在する精神障害 (者) に対する偏見やスティグマは、精神障害者の治療や社会復帰における障壁として危惧されており、国内外において、その低減に向けた取り組みが模索されている。このような中で、近年わが国において、精神障害者自身による主体的活動「当事者活動」が地域で展開されつつあり、地域住民と精神障害者との新たな接触の機会を創出するものとして期待されている。

本論文は、地域社会における精神障害者に対する態度に焦点を当て、地域住民が否定的な態度を低減し、精神障害者を地域の一住民として受け入れ、ともに生きる地域のあり方に関する検討を行う。特に、今日的な媒体である精神障害者当事者活動のもつ可能性に着目し、地域住民の視点から当事者活動の有用性と課題を明らかにする中で、効果的な当事者活動の展開についての知見を得ることを目的とする。

(結果)

本論文は 10 章から構成される。まず、第 1 章から第 4 章においては、用語の定義、および問題の所在と目的を明確化する。第 5 章から第 8 章では、精神障害者当事者活動の展開される一地域 (北海道浦河郡浦河町) における住民に対する調査を実施する。そのうえで、研究より導き出された接触と態度に関する知見、および当事者活動展開における課題と可能性をふまえ、第 9 章から第 10 章において、当事者活動展開のあり方についての検討を行った。

以下に、第 5 章から第 8 章の論文内容の要点を整理する。

第 5 章から第 7 章では、北海道浦河町における精神障害者当事者団体「浦河べてるの家」の施設周辺に在住する成人 2000 名に対する無記名自記式の質問紙調査を行った。調査対象者の選定は、集落抽出法 (無作為抽出法) にもとづき当事者団体の関連施設近隣より地区 (町丁目) ごとに配付順を割り当て、対象地区の全世帯を対象として、現地にて直接配付した。質問項目として、人口統計学的変数、精神障害者・当事者団体との接触に関する項目、精神障害 (者) に対する態度に関する項目 (偏見尺度・社会的距離尺度・肯定的側面に関する項目を使用)、および精神障害者や当事者団体との関わりについての自由記述欄を設け、第 5

章から第7章の各章において、多角的な視点から分析を行った。

第5章では、当事者団体展開地域における精神障害者や当事者団体との接触の状況と精神障害者に対する偏見の状況を明らかにすることを目的とし、接触状況の集計、精神障害者に対する偏見の状況についての他地域との比較、接触度と偏見の程度との関連性の分析を行った。分析結果から、調査地においては、地域住民と精神障害者との多様で高頻度な接触機会が存在し、当事者団体との関わりを持つ者が多数存在することが確認された。しかし、精神障害者に対する偏見は、他地域における結果と比べ、同程度あるいはそれ以上の程度で存在することが示された。また、精神障害者や当事者団体との接触度と偏見の程度との関連についての有意な相関は認められなかった。

第6章では、精神障害者や当事者団体との接触と精神障害者に対する態度との関連を明らかにすることを目的とし、対象者を精神障害者や当事者団体関係者の当事者および近親者を除いた一般住民に焦点化し、住民の接触と態度の状況を類型化により整理した。クラスタ分析の結果から、「低接触群」「偶然接触群」「濃厚接触群」「当事者団体接触群」の4群が抽出され、精神障害者に対する態度は、「偶然接触群」>「濃厚接触群」>「当事者団体接触群」>「低接触群」の順に否定的傾向が強かった。精神障害者や当事者団体との接触の少ない住民は、精神障害に関する問題に対し楽観的に捉えている反面、精神障害者との間接的・偶然的な接触を多く経験している者は、精神障害者に対して拒絶的な態度をもつことが明らかになった。また、精神障害者や当事者団体と濃厚な接触を重ねている住民においては、精神障害者との距離感を置いた関係性を望んでいることが示された。関わりながらも良好な関係性を構築している当事者団体接触群では、当事者団体のサービスの利用等による能動的な関わりをもつことが明らかになった。

第7章では、精神障害者や当事者団体との接触の構成要素、精神障害者に対する態度の構成要素、および両者の関係性を具体的に明らかにすることを目的とし、自由記述内容の分析を行った。KJ法を用いた分類結果から、地域生活における精神障害者との偶然的な出会い、被害体験や事件・トラブルの見聞き等の受動的な接触は、住民の恐怖心や不安感を増大しうること、精神障害者との個人的な関わりの中で苦悩している者がいることが確認された。一方、精神障害者との個人的関わりが住民自身の精神的な充足や精神障害者に対する共感性を生みうることや、さまざまな精神障害者との日常的な関わりを通じ、精神障害者を多様で個性ある人として捉える視点を得ていることが明らかになった。

第8章では、地域住民の当事者団体を通じた精神障害者との関係性構築の過程を明らかにすることを目的とし、当事者団体との継続的な関わりをもつ一般住民に対するインタビュー調査を実施した。あらかじめ対象者要件を設定したうえで、理論的サンプリングを行い、16名の対象者を選定した。対象者の希望する日時・場所において、エピソード・インタビューの技法をもちいて対面式のインタビューを実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる継続的比較分析を行った。分析結果から、当事者団体に対する《無関心・無意識》な状況から、団体への〈能動的参入〉〈関わりの受容〉を通して《意識的な関わり》が始まり、さらに《意識的な関わり》の中で《充足感》や《臨機応変な対応》を獲得し、やがて、《無意識的な関わり》が構築されていくという一連の変容過程が明らかになった。当事者団体を通じた精神障害者との関わりにおいて獲得される《充足感》を構成するサブカテゴリとしては、〈利益の充足〉〈共感性〉〈精神的充足〉が含まれ、《臨機応変な対応》においては〈線引きしない関わり方〉〈直観・判断〉〈ステレオタイプの転換〉〈自分なりの理解・解釈〉〈自分のあり方・役割の自覚〉〈ほどよい距離感・深入りしない〉、《無意識的な関わり》においては〈一町民としての受け止め〉〈日常の一部〉が含まれていた。

(考察)

調査の結果をふまえて、当事者活動展開地域における精神障害者との接触と偏見の実態、精神障害者や当事者団体との接触と態度との関連、地域住民と精神障害者との良好な関係性構築に有用な当事者団体展開のあり方についての考察を行った。

まず、積極的な当事者活動の展開は、地域住民と精神障害者との多様で高頻度な接触機会を創出することが示唆される。しかし、当事者活動の展開される地域においても、精神障害者に対する偏見は他地域同様、軽減すべき課題のひとつであることが示されている。

本研究の第5章において、精神障害者に対する態度と接触度との間に直接の有意な関連は示されなかったものの、接触の形態と態度との関連に着目した第6章や第7章より、接触と態度との関連性についてのいくつかの知見が得られた。

精神障害者や当事者団体との接触の少ない住民は、精神障害に関する問題に対し楽観的な態度を示している反面、精神障害者との間接的・偶然的な接触や、濃厚な接触を重ねている住民は、関わりの中で否定的な態度を構築していることが示された。これらのことから、精神障害者との接触は、多くの場面において住民の否定的な態度の増大につながりうるということが示唆される。加えて、研究結果では、実際に接触のほとんどない群において否定的態度がもっとも低いことが示されたことから、関係性の良好さを判断するためには、偏見尺度や社会的距離尺度といった態度の測定データと、実際上の具体的な接触状況についての客観的データとを併せて考察する必要があることが示唆される。

他方、精神障害者との良好な関係性構築においては、当事者団体を介した能動的な接触や、精神障害者との個人的な関わりが有用であることが確認された。また、否定的態度の創出が懸念される偶然的な接触においても、さまざまな精神障害者の姿を見聞きするという経験が、精神障害に対する固定観念を和らげるものともなることが推察された。

これらの点をふまえ、精神障害者当事者活動の展開が地域住民にもたらすもの（可能性）として、①精神障害者との多様で高頻度な接触機会を生み出しうること、②精神障害者との良好な関係性構築に有用な、住民自身による「能動的な接触」の機会を創出すること、③継続的な関わりによる、知識・利益の享受や精神的充足の増大といった、住民自身の生活の質の向上をもたらしうること、④経験（実体験）にもとづく精神障害に対する理解や、精神障害者との関わりにおいて生じるさまざまな状況に対する柔軟性を獲得しうること、⑤地域社会における精神障害者のインクルージョンを促進するための一助となりうること、の5点が挙げられた。

本研究は当事者活動の展開される一地域における調査であり、当事者活動の展開における地域差や本研究の対象者の特殊性に考慮する必要がある。本研究の知見の一般化には、同様の活動を展開する他地域での調査が必要であると示唆されるが、積極的な精神障害者当事者活動の展開地域として全国的に知られている一地域の住民の実態に着目し、接触形態と態度との関連について多角的な視点から検討を行い、当事者活動の課題と可能性とを明らかにした研究として、今後の精神障害者の地域ケアを考えていくうえで有用な知見を提供しうるものである。

本研究により、当事者活動の展開による接触の拡大にともない、不安や恐怖、関わりによる苦悩等を構築している住民が確認された。当事者活動の地域展開においては、活動の拡大にともない地域生活において生じるさまざまな問題のリスクを予測し、地域における実情を把握し、住民に対する適切なフォロー・アップを行う姿勢が必須である。そのうえで、当事者団体としての特性を活かしながら、地域住民の潜在的なニーズをくみ取り、住民の能動性に働きかけながら、住民をも活動の「当事者」として巻き込んだ活動の展開が望まれる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

精神科医療の場が病院から地域に移行する流れの中で、地域住民と精神障害者が接触する機会が増大することが予想される。地域住民が持つ精神障害（者）への偏見やスティグマは社会復帰の障壁として問題視さ

れているが、その実態は十分に検討されていない。本研究は、精神障害者の主体的活動である「当事者活動」が展開されている1地域を対象とする調査から、住民の精神障害者との接触と精神障害（者）に対する態度との多様な関係性とその変容の過程を明らかにし、当事者活動が持つ可能性に言及している。当事者活動に着目した点に独自性があり、精神障害者の社会復帰の推進に寄与し得る科学的知見を示した研究として高く評価される。

平成24年1月10日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。